

第1章 北朝鮮の「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」の現段階 ——核使用の宣言的措置と弾道ミサイル系列生産——

倉田 秀也

問題の所在——二つの戦争想定

核不拡散条約（NPT）の核兵器国、未締約国を問わず、「最小限抑止」をとる国は、核先制不使用（NFU）という宣言的措置をとることがある。この核態勢をとる中国、インドではともに、退役軍人、政策決定に関与した元政府高官などからNFUを再検討する声が上がっても、政府はそれを明確に否定した上で政府見解としてNFUを再確認してきた。

これに対して北朝鮮は、最初の核実験を予告した外務省声明（2006年10月3日）で「絶対に核兵器を先に使用しない」と宣言したにもかかわらず、第3回核実験（2013年2月12日）の後、朝鮮中央通信論評（2013年3月6日）が「核先制打撃」に初めて言及して以来、弾道ミサイル実験に際して「核先制打撃」は党機関紙上でも常套的に用いられた。核使用の指針については金正恩の発言も一貫していなかった。2016年5月の朝鮮労働党第7回大会の活動総括報告で、「敵対勢力が核でわれわれの自主権を侵害しない限り先に核兵器を使用しない」（傍点は引用者）¹と述べて、NFUに言及したにもかかわらず、その翌月22日の「中長距離戦略弾道弾」と呼ぶ「火星-10」（「ムスダン」）を発射したとき、「先制核攻撃能力を持続的に拡大、強化」する必要性に言及していたのである。

北朝鮮が核使用について相反する言辞をとるのは、あえて曖昧性を意図したというよりは、北朝鮮がそもそも、NFUを構成要素とする「最小限抑止」と呼ばれる核態勢と「核先制打撃」を必要とする二つの核態勢を同時にとっているためと考えるべきであろう。振り返ってみれば、金正恩は朝鮮労働党中央委員会全員会議（2013年3月31日）で「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」の二つに触れ、朝鮮半島で起こりうる戦争を二つに大別していることを示唆していた²。これを受け、最高人民会議法令「自衛的核保有の地位を一層強化することについて」（2013年4月1日）が採択されたが、その第4条では核使用について「敵対的な他の核保有国がわが共和国を侵略したり攻撃したりする場合、それを撃退し報復を加えるために（中略）使用できる」とされた。ここでいう「敵対的な他の核保有国」は米国を指すと考えてよいが³、この一文もNFUのような文言を用いつつも、その「侵略」「攻撃」の手段を「核」に限定していなかった。別言すれば、通常兵力による「侵略」「攻撃」を北朝鮮が「撃退し報復を加える」とき核使用は排除されず、むしろ北朝鮮が先に核使用に踏み切る可能性すら示していた。このように、北朝鮮の核態勢においてNFUと「核先制打撃」は、宣言的措置として相互に排他的な関係にはなっていない⁴。

さらに、金正恩がいう「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」は、北朝鮮がこれまで開発してきた弾道ミサイルの生産系列にも関連する。「火星」系列の弾道ミサイルは、米本土への対価値攻撃を想定しつつ、液体燃料による射程延長を主眼に開発され、大陸間弾道ミサイル（ICBM）「火星-14」（KN-20、2017年7月4日、7月28日に発射実験）、「火星-15」（KN-22、2017年11月29日に発射実験）で当初の目的を達成した。他方、潜水艦発射型弾道ミサイル（SLBM）の開発は「北極星」系列ですすめられ、そこでは固体燃料による発射形式の開発を主眼としてきた。以下、「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」を核使用の宣

言的措置を含めて検討した後、弾道ミサイル開発の系列生産の関連性を改めて確認してみる。これを踏まえた上で、2020年10月の朝鮮労働党創建75周年慶祝閱兵式（以下、党75周年閱兵式と略記）の軍事パレードでの金正恩演説、21年1月の朝鮮労働党第8回大会（以下、第8回党大会と略記）での金正恩の活動総括報告を検討し、閱兵式での軍事パレードに登場した装備を北朝鮮の核態勢に位置づけてみる。

1. 「最小限抑止」と「エスカレーション阻止」——系列生産の相乗効果

(1) 宣言的措置の「二面性」——NFUと「核先制打撃」

金正恩がいう「戦争抑止戦略」が想定する戦争とは、米国による直接の核攻撃によるものと考えられ、それを抑止する態勢は——中国、インドなどの「最小限抑止」と同様に——NFUという宣言的措置と第1撃後も残存する第2撃能力で構成される。第2撃能力は米本土の大都市を破壊する対価値報復攻撃の可能性を示すことで米国に第1撃を躊躇わせる「最小限」でよく、そこでは弾道ミサイルの命中精度よりも破壊力に比重を置く。

これに対して、「戦争遂行戦略」が想定するのは——意図的、偶発的を問わず——前線での小規模の武力衝突が在韓米軍、半島外の米軍の介入にエスカレートする戦争であろう。2015年8月、北朝鮮が敷設した地雷により韓国軍下士官が負傷したことに端を発した「蓮川砲撃戦」は、その端的な一例となる。そのとき、朝鮮人民軍の砲撃に韓国軍が自走砲で反撃した後、東豆川の在韓米軍第210砲兵旅団は砲撃態勢を整えていたというが、事態収拾のため協議を提案した韓国側との間で「8・25合意」が交わされて事態は一旦収拾した⁵。ただし、かりに事態収拾に失敗して「蓮川砲撃戦」に在韓米軍が介入しようとしたならば、北朝鮮はそれを阻止する必要に直面したであろう。在韓米軍基地は再配置計画により平澤などの南方に移転しつつあったが、北朝鮮がその間、固体燃料化された短距離弾道ミサイル（SRBM）「トクサ」（KN-02）、多連装ロケット砲の射程を延ばしたのも、南方に移転する在韓米軍基地への対兵力攻撃能力をもつことで、在韓米軍の介入を阻止する最初のエスカレーション・ラダーを構成するためであった。これら対南兵力攻撃能力は19年から20年にかけて、北朝鮮版「イスカンデル」とも呼ばれるKN-23、600ミリ口径の発射管をもつ「超大型放射砲」（KN-25）などの発射実験で集中的に誇示された⁶。

しかし、これら対南兵力攻撃能力にもかかわらず、米軍の介入を阻止できなかった場合、北朝鮮は在日米軍基地、グアムのアンダーセン米空軍基地など、朝鮮半島外の米軍基地を確実に攻撃できる能力を示して介入を阻止することを考えなければならない。このような対兵力攻撃能力は——対価値攻撃能力とは対照的に——破壊力よりも命中精度に比重を置く。ただし、標的が1000キロ以上離れた在日米軍、約3400キロ以上離れたアンダーセン米空軍基地の攻撃には、弾頭を軽量化しなければならない。弾頭が軽量化されても破壊力を維持するには、やはり核弾頭でなければならない。北朝鮮が核のない在日米軍基地使用を核による威嚇で抑止しようとしたにもかかわらず、米国が在日米軍基地を使用したとして、そこで北朝鮮が核を使用すれば、米国よりも北朝鮮が先に核を使用することになる。

2013年3月に朝鮮中央通信論評が「核先制打撃」に言及し、北朝鮮は朝鮮半島外の米軍基地への対兵力攻撃能力を誇示することになるが、そこでは「核先制打撃」に加え、標的を正確に打撃できる「精密核打撃」が強調された。15年2月の党政治局会議の決定書には

「現代戦の要求に即した精密化、軽量化、無人化、知能化された（中略）先端武力装備をより多く開発する」ことが謳われ、その後発射された弾道ミサイルの多くは、在日米軍あるいはアンダーセン空軍基地への対兵力攻撃を想定していた⁷。

在日米軍への対兵力攻撃能力としてはやはり、2017年3月6日に「発射訓練」として発射された「火星-9」（「スカッド-ER」）を挙げておかなければならない⁸。「火星-9」の射程は約1000キロと推測されるが、それは東京、大阪などの大都市をあえて射程から外し、朝鮮戦争当時、国連軍部隊の発進基地となった佐世保米海軍基地、岩国米海兵隊航空基地への対兵力攻撃を想定していた。この発射実験の後、金正恩は「われわれ式の超精密化・知能化されたロケットを絶えず開発し、質量的に強化する」と述べたと伝えられた。また、朝鮮人民軍戦略軍はこの発射訓練が「在日米軍基地を攻撃目標として行われたことを隠さない」とする代弁人談話を発表していた。

在日米軍への対兵力攻撃としては、SLBM開発を目的として「北極星」系列も挙げられる。この系列は2016年8月26日の「北極星-1」（KN-11）の発射実験の後、17年2月には亀城で移動式発射台（TEL）を用いた地上から「北極星-2」（KN-15）の発射実験が行われ、ロフテッド軌道で高度約550キロ、距離約500キロ飛翔し、通常軌道で発射されれば約2000キロの射程をもつと推定された。「北極星-2」の発射実験の際、朝鮮中央通信は「米本土とともに日本駐屯の米帝侵略軍基地（複数）に精密に照準を合わせ」（括弧内は引用者）ているとする論評を掲げ、金正恩も「弾道弾の命中性が非常に正確」と述べ、それが対兵力攻撃を想定していたことを明らかにしていた。

グアムのアンダーセン米空軍基地に対しては、「中長距離戦略弾道弾」と呼ばれる「火星-10」（「ムスダン」）が挙げられる。「火星-10」は発射失敗を繰り返した後、同年6月に発射に成功したとき、最大射程は約4000キロに達するとみられたが、金正恩は発射成功を受け、「先制核攻撃能力を持続的に拡大、強化する」必要性に触れていた。また同じく「中長距離戦略弾道弾」と呼ばれた「火星-12」（KN-17）が2017年5月14日に発射されたが、朝鮮中央通信は「最大頂点高度2111.5キロまで上昇飛行して距離787キロ」飛翔したと発表し、ロフテッド軌道で発射したことを明らかにしたが、通常軌道で発射された場合、約3000から5000キロ飛翔するとみられ、アンダーセン米空軍基地への対兵力攻撃を想定していた。実際、同年8月8日、朝鮮人民軍戦略軍が代弁人声明を通じて「米領グアム周辺を『火星-12』で包囲射撃することを検討している」ことを明かにし、その翌日、金絡謙戦略軍司令官は「グアム包囲射撃方案」を発表しつつ、「射程3356.7キロを1065秒間飛行した後、グアム島の周辺30から40キロの海上水域に着弾することになるであろう」と発表した。結局、「グアム包囲射撃」は見送られたものの、この「方案」はアンダーセン米空軍基地が「火星-12」の「核先制打撃」、「精密核打撃」の標的であることを示していた。

このように、金正恩がいう「戦争遂行戦略」とは、通常兵力による対南兵力攻撃から、それが失敗したときに在日米軍基地、アンダーセン米空軍基地への対兵力攻撃の能力を示すことで、在韓米軍の介入、朝鮮半島外の米軍の介入を阻止する「エスカレーション阻止」と同義と考えてよい。これらに失敗したときには、北朝鮮は米本土への対価値攻撃を考えざるをえない。これは北朝鮮への米国による直接の核攻撃を想定した「戦争抑止戦略」を構成すると同時に、「戦争遂行戦略」の最後のエスカレーション・ラダーにも想定されていることになる。したがって、北朝鮮が「戦争抑止戦略」の下にNFUを掲げ、米本土への対

価値攻撃を想定しても、それは「戦争遂行戦略」を構成する「核先制打撃」と「核精密打撃」という対兵力攻撃を否定するわけではない。

(2) 系列生産の領域——射程延長・燃料・発射方式

「火星」系列での弾道ミサイル開発は「テポドン」に遡るが、「テポドン-2」派生型がとった事前に発射台に装着した上で液体燃料を注入して発射する方式から、上述の「火星-10」の発射以降、TELから発射に転じて一定の秘匿性を得た。また、2017年5月から9月まで3回にわたる「火星-12」はTELから発射された上、同年7月の2回の「火星-14」、同年11月の「火星-15」の発射実験でさらに射程を延ばし、ICBMとしての射程をもつに至った。しかし、射程延長に成功したとはいえ、「火星」系列の弾道ミサイルの実験は一貫して液体燃料を用い、発射の「即応性」を欠いたままであった。「火星」系列はまた、ミサイルに直接点火し噴射させるホット・ローンチをとっており、「火星-15」でさえローンチ・パッドからホット・ローンチで発射されていた。

これに対して「北極星」系列は、SRBM「トクサ」の技術を用い、「北極星-1」から固体燃料が開発された。さらに、17年2月にTELで「北極星-2」が発射された際も、金正恩は「大出力固体ロケットエンジンへと確固として転換した」ことを誇示していた。「北極星」系列がSLBM開発を主たる目的としていたため、これらの実験は圧縮空気、高圧ガスなどでミサイルを浮上させた後に噴射させるコールド・ローンチ発射方式をとったが、「火星」系列に「北極星」系列の固体燃料とコールド・ローンチ発射技術が転用されれば、「火星」系列も固体燃料化された上でTELを損傷することなく発射でき、サイロに格納されても弾道ミサイルの噴射熱でサイロ底部を損傷することなく複数回の発射も可能となる。

他方、「北極星」系列もまた、射程距離を延ばしてきたことは確かではある。「北極星-1」は2016年4月に行われた実験では約30キロ飛行したに過ぎなかったが、同年8月の再実験では約500キロ飛行した。また、2度の発射実験で「北極星-2」が通常軌道で約2000キロの射程をもつと推定されたことは指摘した通りである。しかし、2019年10月2日に元山沖からロフテッド軌道で発射された「北極星-3」(KN-26)は、約460キロ飛行したといえ、3段式に改良されたにもかかわらず、通常軌道で発射されたとしても「北極星-2」の射程約2000キロを大きく超えるとは観測されなかった。「北極星」系列は——「火星」系列とは異なり——一度重なる発射実験にもかかわらず、「中距離戦略弾道弾」の射程を超えていなかったことになる。

確かに、「北極星」系列のSLBMがそれ以上射程を延ばそうとすれば、「火星」系列から射程延長の技術を得ることもありうる。しかし、射程延長したSLBMは大型化し、それを弾道ミサイル潜水艦(SSB)が搭載するには、当然その空間がなければならない。北朝鮮のSSBはロシア、中国ではすでに退役した排水量約1800トンの「033型」(中国で生産された「ロメオ」級潜水艦、水中排水量約1830トン)を基盤とする「コレ(鯨)」級(水中排水量約1650から2000トン)と考えられるが⁹、旧ソ連初のSSB「611型」(「ズルー」級)潜水艦の水中排水量は2400トンであり、搭載されたSLBMも1から2基であった¹⁰。「ズルー」級を下回る「コレ」級では複数のSLBM搭載は困難とみられ、実験用と考えられていた。北朝鮮がその後建造に着手したSSBは米国で「シンボ(新浦)」級と呼ばれたが、「シンボ-B」級の水中排水量も約1650から2000トンと推定され、「コレ」級を上回るとは考

えらなかつた。もとより、北朝鮮のSSBが排水量とSLBMの発射管を増やしてきたことは確かである。2017年10月に開発中とされたSSBは「シンボ-C」級と呼ばれ、水中排水量2000トンを超えると推測された¹¹。また、金正恩が2019年7月22日に視察した「新たに建造された潜水艦」は「北極星-1」なら3から4本の発射管を備えられると観測され、もはや実験用ではないことは明らかでありながら¹²、依然「ロメオ」級に留まるとされていた¹³。

しかも、北朝鮮のSSBはディーゼル燃料を用い、潜行距離も約1500海里（約2800キロ）と推定されるが、北朝鮮のSSBに燃料補給する国は想定し難く、SSBが他国に停泊することなく帰還しなければならないことを考えると、実際の作戦上の潜行距離はその半分以下となる。金正恩が視察した上述の潜水艦については、「東海（日本海を指す）作戦水域で任務を遂行することとなり、作戦配備を目前にしている」（傍点、括弧内は引用者）¹⁴と報じられ、作戦水域が日本海を越えないことを自認していた。「北極星-3」の発射に際して、『労働新聞』は「われわれの北極星はどこにでも自分の発射地点を定めることができ、その射程半径は想像を超えるものかもしれない」¹⁵とその能力を誇示したが、北朝鮮はSSBについては日本海での作戦を念頭におき、SLBMもこれまでの実験で示された「中距離弾道弾」の射程をもつ「北極星」系列を運用することを考えなければならない。

「ロメオ」級SSBの作戦上の潜航距離を1000キロ強と仮定した上で、「北極星-3」でも約2000キロの射程を大きく上回らないとすれば、在日米軍はともかく、北朝鮮から3400キロ以上南方にあるアンダーセン米空軍基地を射程に収めることは難しい。アンダーセン米空軍基地を確実に射程に収めるには、「ロメオ」級を上回る潜航距離をもつSSBを建造するか、あるいは「火星」系列の射程延長技術を援用して、「北極星」系列のSLBMの射程を延ばすしかない。しかし、後者の場合も、長射程化に伴い大型化したSLBMを搭載するには、やはりSSBも大型化しなければならない。「火星」系列から「北極星」系列の技術転用は、「北極星」系列から「火星」系列への技術転用よりも困難と判断してよい。

2. 「戦争抑止力」概念と多弾頭化の方向性——党75周年閲兵式

(1) 「火星」系列エンジン出力増大——「重大実験」と「新たな戦略兵器」

党75周年閲兵式を検討する前に確認しておくべきは、2019年12月7日に西海衛星発射場で行われた「重大実験」である。北朝鮮はこの実験の詳細を明らかにしていないが、その結果は、「朝鮮民主主義人民共和国の戦略的地位をもう一度変化させる上で重要な働きをすることになるだろう」¹⁶とされ、同月13日に再び西海衛星発射場で同様の実験が行われたときも、「最近相次いで成し遂げている国防科学研究の成果は（中略）信頼できる戦略的核抑止力を一層強化するのに適用されるだろう」と報じられた¹⁷。なお、2回目の実験の後、朴正天朝鮮人民軍総参謀長は「米国の核の脅威を確実に頼もしく牽制、制圧するための朝鮮のさらなる戦略兵器の開発にそのまま適用されることになるであろう」（傍点は引用者）¹⁸と述べたという。

振り返ってみて、西海衛星発射場では過去、2016年4月9日に「新型大陸間弾道ミサイルの出力ロケット発動機（エンジン）燃焼実験」（括弧内は引用者、以下「発動機」は「エンジン」と訳出する）、後に「3・18革命」と呼ばれる17年3月18日の「高出力ロケット

エンジン地上燃焼実験」、同年9月20日には「静止衛星運搬ロケット大出力エンジンの地上燃焼実験」が行われ、一貫して「火星」系列に属する液体燃料による弾道ミサイルのエンジン出力向上のための実験が行われていた¹⁹。西海衛星発射場で固体燃料によるエンジン実験が行われたと報じられたことはない。16年3月24日の「高出力固体燃料ロケットエンジン燃焼実験」が行われたときも実験場は特定されず²⁰。翌17年10月26日の固体燃料のエンジン改良実験も、咸鏡南道にある実験施設で行われたという²¹。19年12月の二回の「重大実験」も、「火星」系列の液体燃料によるエンジンの出力向上を目的にしていたと考えてよい。

ところが、北朝鮮はすでに2017年11月の「火星-15」発射実験で、米本土全体を射程に収めるICBMの開発に成功していた。北朝鮮は「火星-15」発射実験の際、政府声明で「目標としたロケット兵器体系開発の最終段階に達した最も威力ある大陸間弾道ロケット」とし、「米国本土全域を打撃できる超大型重量級核弾頭の装着が可能」²²と自賛していたが、北朝鮮が「火星-15」以上のエンジン出力を必要としたのは、「超大型重量級核弾頭」以上に重量化されたペイロードが想定されたからに他ならず、その一つの可能性として多弾頭化が考えられる。北朝鮮がICBM多弾頭化を「火星-15」以降の課題と考えていたとすれば、「火星-15」が「ロケット兵器体系開発の最終段階」に達したとしても、「到達点」には達していなかったことになる。

2019年12月22日の党中央軍事委員会第7期第3次拡大会議も、「重大実験」を受けてもたれたと考えてよい。そこでは「党の軍事戦略および方針を徹底的に貫徹して国の防衛力を画期的に強化するための部門別の課題が改めて強調され新たに提示された」²³というが、「部門」には「火星」系列の弾道ミサイルに関するものも含まれていたであろう。そこでの「課題」も「重大実験」でエンジン出力を増したICBMの弾頭部分に関わっていたと考えてよい。さらに、金正恩は同年12月28日から31日にかけての党中央委員会第7期第5次全員会議で、「戦略兵器の開発もより活発に推し進めていかなければならない」と述べた上で、「世界は遠からず朝鮮が保有することになる新たな戦略兵器を目撃する」²⁴と予告した。「目撃」が発射実験を意味するかはともかく、「新たな戦略兵器」は液体燃料のエンジン出力向上による「火星」系列を指していたと考えてよい。

(2) 「戦争抑止力」概念——宣言的措置との相関関係

その後、2020年5月23日に党中央軍事委員会第7期第4次拡大会議が開かれたが、そこでは党75周年閲兵式での金正恩演説にも言及される「戦争抑止力」の概念に触れられた。この会議について『労働新聞』は、「国家防衛力と戦争抑止力（war deterrent）を一層強化すべき必須の要求から発して（中略）敵対勢力の持続的な大小の軍事的脅威を頼もしく牽制できるよう、国の全般的武力を政治思想的、軍事技術的に一層飛躍させるための重要な軍事的対策（複数）」²⁵（傍点、括弧内は引用者）が研究検討されたと報じていた。

もとより、「戦争抑止力」という概念は、金正恩がすでに2013年3月の党中央委員会全員会議でも触れており²⁶、新しい概念ではない。20年に掲げられた「戦争抑止力」もその延長線上にあるが、ここでいう「戦争抑止力」とは、核抑止力に特化されていないため、ICBMによる第2撃能力を構成要素とする「戦争抑止戦略」だけで構成されるわけではない。19年夏、北朝鮮がKN-23、「超大型放射砲」など、通常兵力による対南兵力攻撃能力を誇

示したとき、『労働新聞』はそれらを「社会主義朝鮮の限りなく強大な軍事的威力を誇示するチュチェ兵器の連続的な開発、完成」と自賛した上で、改めて「戦争抑止力」の概念を掲げていた²⁷。上述の党中央軍事委員会拡大会議について『労働新聞』が、「戦争抑止力」の要求から「大小の」軍事的脅威を「牽制」と述べたのは、「戦争抑止力」が、小規模の武力衝突への在韓米軍の介入を通常兵力による対南兵力攻撃能力で「牽制」することに始まり、それが失敗した際の在日米軍、アンダーセン米空軍基地からの戦闘行動の発進を「核先制打撃」で「牽制」する包括的な概念であることを示している。

そうだとすれば、「戦争抑止力」とは、「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」の双方において開発された装備に裏づけられた概念でもある。この概念の下で「核抑止力」が強調されても、通常兵力による対南兵力攻撃を否定するものでもなく、通常兵力が強調されても核抑止力を否定するものもない。2020年7月18日にもたれた党中央軍事委員会第7期第5次拡大会議では「戦争抑止力を一層強化するため（の）核心問題」（括弧内は引用者）が討議され、「革新的な重要軍需生産指標」が審議、承認とされたというが²⁸、同月27日の「祖国解放記念日」（朝鮮戦争軍事停戦記念日）に催された第6次全国老兵大会で金正恩は、「頼もしく効果的で自衛的な核抑止力で、もはや戦争という言葉はないであろうし、わが国家の安全と未来は永遠にしっかりと保障されるでしょう」²⁹と述べていた。

この文脈から、金正恩が2020年10月10日の党75周年閲兵式で行った演説でまず取り上げるべきは、核使用に関する宣言的措置であろう。金正恩はここで「戦争抑止力」に触れた上で、それが「決して濫用されたり、絶対に先制して使われたりすることはない」と述べる一方で、「いかなる勢力であれ、わが国家の安全を脅かすのなら（中略）最も強力で攻撃的な力を先制して総動員して懲らしめるでしょう」³⁰と述べていた。ここでいう「戦争抑止力」が「最も強力で攻撃的な力」である核戦力を含むとすれば、ここで金正恩はNFUと「核先制打撃」という相容れない核使用の指針に同時に言及したことになる。

しかし、「戦争抑止力」がICBMを含む核による第2撃能力で構成される「戦争抑止戦略」と通常戦力による対南兵力攻撃から、在日米軍、アンダーセン米空軍基地への対兵力攻撃に至る「戦争遂行戦略」の双方を構成する軍事力全般を指すのなら、「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」それぞれの宣言的措置に言及することもありえる。繰り返すまでもなく、「戦争抑止戦略」が核使用に関する宣言的措置として米国の核による第1撃を想定したNFUを掲げていたのに対し、「戦争遂行戦略」は最初のエスカレーション・ラダーとなる対南兵力攻撃は通常戦力で構成されながら、それが失敗した際の米国による在日米軍、アンダーセン米空軍基地使用を抑止するために「核先制打撃」、「精密核打撃」を公言していた。金正恩はここで「戦争抑止力」という包括的概念に言及することで、「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」の相反する核使用の宣言的措置に同時に言及したことになる。

ただし、金正恩は「戦争抑止力」に言及したとき、「戦争遂行戦略」をより念頭に置いたであろう。金正恩は「戦争抑止力」について、「敵対勢力」による「核の脅威を含むあらゆる危険な企図と威嚇的行動」を「抑止し、統制、管理（contain and control）する自衛的正当防衛手段」と説明していた。ここで金正恩が「抑止」に加えて「統制」と「管理」に触れたのは³¹、「戦争遂行戦略」が「エスカレーション阻止」と同義であることをよく示していた。

(3) 「火星-16」と「北極星-4」——「重大実験」の成果とSLBM運用化の課題

党75周年閲兵式の軍事パレードでは、「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」のそれぞれに用いられる兵器が登場した。まず挙げるべきは、11軸の自走TELに搭載された「火星-16」とみられるICBMであろう。「火星-16」は、「火星-15」に続くICBMとみられるが、「火星-15」のペイロードが約1000キロと推測されたのに対して、約2000キロから3500キロまでのペイロードに耐えうると推定されている³²。さらに、そのノーズコーン部分は「火星-15」のそれと比べてみても長く、4個までの弾頭を搭載できるとみられ³³、多弾頭化の想定の下に設計されていたとみてよい。2019年12月の2回目の「重大実験」に際して朴正天朝鮮人民軍総参謀長は、その結果が「さらなる戦略兵器の開発にそのまま適用されることになるであろう」（傍点は引用者）と述べていたが、それが重量化したペイロードに対応するエンジン出力増大のための実験であったなら——朴正天がいうように——その成果は「そのまま」、「火星-16」に適用されたと考えてよい。金正恩が党中央委員会第7期第5次全員会議で「世界は遠からず」目撃すると予告した「新たな戦略兵器」も、「火星-16」であったことになる。

ICBMの多弾頭化の目的が米本土のミサイル防衛を攪乱することにあるとはいえ、「火星-16」が米本土を射程に置く対価値攻撃能力である以上、そこに求められる能力は、対南兵力攻撃に求められるものとは異なる。対南兵力攻撃は在韓米軍基地に配備される最高迎撃高度約15キロのPAC-3（CRI）、これとほぼ同程度の迎撃高度をもつ韓国軍の韓国型ミサイル防衛のM-SAM「天弓」、最高迎撃高度約60キロのL-SAM「天弓-2」などの終末防衛を回避しなければならない。ところが、対兵力攻撃はその命中率を高める程に、軌道が明らかとなるため迎撃される可能性は相対的に高まる。2019年に発射実験されたKN-23は、ミッドコースから跳躍型の軌道をとることで攻撃される側の弾道計算を困難にし、この「命中率と脆弱性の逆説」から逃れようとしたが³⁴、対南兵力攻撃の装備の目的は、あくまでも軍事施設という狭い標的に命中することにあった。

これに対して、米本土への対価値攻撃には、対兵力攻撃能力に求められる程度の「命中率」は必要とされない。多弾頭化により個々の弾頭の破壊力は低下するが、米国のミサイル防衛を攪乱することで核弾頭が着弾する可能性は相対的に高まる。米本土に対する対価値攻撃は、ミサイル防衛を攪乱して都市という大きな標的の一部に着弾できる程度の命中率があればその目的は達成できる。米本土を射程に置くICBMミサイル防衛の攪乱には、対南兵力攻撃が回避しなければならない「命中率と脆弱性の逆説」は考慮しなくてもよい。北朝鮮が多弾頭化を完了しているとは考えにくいだが、それまでの過渡期においてノーズコーン部分に核弾頭とともに、デコイ（囮弾頭）を搭載することで、米国のミサイル防衛を攪乱しようとすることは考えておいてよい。

他方、党75周年記念閲兵式の軍事パレードには、SLBM「北極星-3」の後継とみられる「北極星-4」が登場した。金正恩と金正官はともに演説ではSLBMには触れなかったが、「北極星-4」のノーズコーン部分は「北極星-3」より拡大し、「火星-16」と同様、多弾頭化の「能力」を誇示している。ただし、全長は「北極星-3」よりも短い8から9メートルの2段式と推測され、SSBへの搭載を念頭に置いている。直径が若干拡大しているものの、それにより注入する固体燃料の総量が大幅に増大するとは考えにくく、発射されたとして射程延長が望めるわけではない。北朝鮮はこれ以降、「北極星」系列のSLBMを運用し、在日米

軍だけではなくアンダーセン米空軍基地を射程に収めるためにSSB大型化の必要性を改めて認識したに違いない³⁵。

3. 系列生産間の「不均衡」な相乗効果——第8回党大会

(1) 宣言的措置の踏襲——「先制」と「報復打撃」

2021年1月5日に開かれた第8回党大会で金正恩は活動総括報告を行うが、ここでまず確認しておくべきは、やはり核使用の宣言的措置であろう。金正恩はこの報告の後段部分（「祖国の自主的統一と対外関係の発展のために」）のなかで、「敵対勢力がわれわれを狙って核を使用しない限り濫用しない」（傍点は引用者）と述べていた³⁶。この言辞に限ってはNFUに等しく、金正恩が16年5月の第7回党大会の活動総括報告で言及した「敵対勢力が核でわれわれの自主権を侵害しない限り先に核兵器を使用しない」（傍点は引用者）を踏襲するかたちとなっている。ところが、金正恩はそれより前段部分（「社会主義建設の画期的前進のために」）の国防力に関する部分では、ICBMとの関連で「核先制および報復打撃能力を高度化することに関する目標が提示された」（傍点は引用者）と述べ、核が報復としてだけでなく先制使用されうること触れた。金正官国防相もまた、閲兵式での軍事パレードに先立って行った演説で、「共和国武力は朝鮮半島地域でのあらゆる軍事的脅迫を徹底的に抑制（contain）する」として、「エスカレーション阻止」を示唆する一方、「もし敵対勢力がわが国の安全を少しでも侵害するならば、最も強い攻撃力を先制的に動員して徹底的に懲らしめる」（傍点は引用者）と述べた。ここで「先制的に動員」の箇所は、朝鮮中央通信の英文表記では“preemptively use”となっていた³⁷。「最も強い攻撃力」が核戦力を指すとして、それを「先制的に使用（use）」するのなら、これは核先制使用を宣言したに等しい。

ただし繰り返すまでもなく、核使用について相反する発言は、2013年3月の党中央委員会全員会議以来、北朝鮮の核態勢が二つの戦争を想定していたことをみれば矛盾とはいえない。むしろ、金正恩はここで、党75周年閲兵式での演説と同様、党中央委員会全員会議で示した「最小限抑止」に相当する「戦争抑止戦略」と「エスカレーション阻止」のための「戦争遂行戦略」が有効であったことを示していた。実際、金正恩はここで「軍事技術的強勢を不可逆的なものにし、戦争抑止力、戦争遂行能力を最高の域に引き上げたことについて総括した」と述べたと報じられ、「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」に直接触れなかったものの、その能力に言及していた。なお、金正恩はここで、「核の脅威が伴わざるを得ない朝鮮半島地域における各種の軍事的脅威について主導性を維持しながら徹底して抑止し、統制管理（thoroughly contain, control and handle）できるようにしなければならない」（傍点は引用者）³⁸と述べていた。これは、金正恩が党75周年閲兵式での演説で「戦争抑止力」に言及したとき、「敵対勢力」による「核の脅威を含むあらゆる危険な企図と威嚇的行動」を「抑止し、統制、管理する」必要に触れたことと同様の文脈に属する。

しかも、ICBMについてその使用は、上述の通り「戦争抑止戦略」を構成すると同時に、「戦争遂行戦略」——「エスカレーション阻止」——の最終段階に想定されていた。ICBMは「報復」としても使用されるが、米国が朝鮮半島での武力衝突をエスカレートする際に核を用いなければ、北朝鮮が先に核を使用することになる。確かに、在日米軍、アンダー

セン米空軍基地への核による対兵力攻撃をせず、ICBMによる米本土への対価値攻撃を行うとは考えにくい。ICBMが北朝鮮による先制核使用の文脈に置かれたことを考えれば、金正恩がICBMとの関連で、「報復」とともに「核先制」に触れたことは「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」が収斂しうることを再確認したと考えてもよい。

(2) 「北極星」系列から「火星」系列への技術移転の効用——ICBM 固体燃料化

第8回党大会は各部門からの報告と討議を経て閉会するが、閉会翌々日の1月14日に異例に、しかも夜間に閲兵式と軍事パレードが挙行された。軍事パレードには新たなICBMは登場しなかったが、金正恩は活動総括報告で「火星-16」について「われわれの核戦力が到達した最高の近代性と打撃能力を余すところなく誇示した」と述べ、ICBMの「目標を正確に命中させる能力」(傍点は引用者)を高めると述べたことは吟味に値する。再び「火星-15」発射実験の際の政府声明を振り返ってみれば、そこで「火星-15」は「米国本土全域を打撃できる超大型重量級核弾頭の装着が可能な大陸間弾道ロケット」(傍点は引用者)³⁹とされていた。金正恩の活動総括報告で、ICBMに求められる能力が「打撃」から「命中」に移行したことになる。

ただし上述の通り、ここでいう「命中」とは米本土への対価値攻撃を想定しているのなら、そこでは在韓米軍基地、「中距離戦略弾道弾」が標的とする在日米軍基地、「中長距離戦略弾道弾」が標的とするアンダーセン米空軍基地へのそれと同程度の命中精度が求められるわけではない。この文脈から、金正恩が「国防科学研究部門で多弾頭個別誘導技術をさらに完成するための研究を最終段階で行っている」と明らかにしたことは特筆してよい。前年10月の党75周年閲兵式の軍事パレードに登場した「火星-16」のノーズコーン部分が拡大したのはやはり多弾頭化を意図していたことが、金正恩の発言で確認されたことになる。別言すれば、多弾頭化により核弾頭が米国のミサイル防衛を攪乱することで米東海岸の都市にも着弾でき、対価値攻撃の目的を達成しうることが誇示された。金正恩は活動総括報告でICBMの「研究」が「最終段階にある」と述べたが、その「研究」は、多弾頭化を指していたと考えてよい。

金正恩が「国防工業の飛躍的な強化発展のための戦略的な課題」を挙げるなかで、ICBMの射程として初めて「1万5000キロ」という数値を示したこともこれに関連する。2017年11月に発射実験された「火星-15」は、そのときの政府声明によると「到達高度4475キロまで上昇し、950キロ」を飛翔する軌道を辿ったというが、通常軌道で発射された場合、射程は米フロリダ半島を越えると推測されていた⁴⁰。これに対して金正恩が言及した「1万5000キロ」の射程は、カリブ海を越えて大西洋にまで達する。あえて米東海岸との最短距離以上の射程を提示したのは、多弾頭化によって弾頭重量が増して射程距離が縮小しても、米東海岸の都市が射程内に入ることを示すためであったろう。

金正恩はまた、活動総括報告で、弾道ミサイルの系列生産にも触れていた。ここで金正恩は「火星」系列と「北極星」系列がそれぞれ「特有の作戦的使命」に即していると述べたが、上述の通り、「火星」系列では液体燃料で開発がすすめられ、ホット・ローンチとはいえTELからの発射で秘匿性を得ようとしたのに対し、「北極星」系列では固体燃料で開発がすすめられ、射程距離は「中距離」に留まりながらもコールド・ローンチで発射されてきた。弾道ミサイルの系列生産の目的が異なる技術の開発をすすめつつ、それらを転用

することで相乗効果を及ぼすことにあったとすれば、ここで金正恩が述べた「近いうちに水中および地上固体エンジン大陸間弾道ロケットの開発を計画通りに推し進め」（傍点は引用者）ると言及したことも、弾道ミサイルの系列生産の相乗効果と関連している。

その相乗効果の一つは、液体燃料で開発がすすめられた「火星」系列に「北極星」系列の固体燃料の技術を転用することにある。金正恩がいう「地上固体エンジン大陸間弾道ロケット」——固体燃料化された ICBM——の開発が可能となり、これまで「火星」系列が欠いていた発射の即応性も得ることができる。また、「北極星」系列で用いられたコールド・ローンチの技術が「火星」系列に転用されれば、ローンチ・パッドがなくとも TEL を損傷せずにミサイル発射が可能となり、ミサイルがサイロに格納されてもその底部を損傷することなく複数回発射できる。金正恩が「計画通りに推し進め」と言及したことは、弾道ミサイルの系列生産による相乗効果を予め想定していたことを示唆している。

(3) 「火星」系列から「北極星」系列への技術移転の限界——SSB 大型化の優先

しかしこれに対して、金正恩は活動総括演説で ICBM について射程延長を誇示したことは対照的に、SLBM の射程延長については触れなかった。上述の通り、現有の「ロメオ」級に「北極星」系列の SLBM を搭載できたとしても、アンダーセン米空軍基地を射程には収めきれず、射程を延長して SLBM が大型化すれば、「ロメオ」級の潜水艦への搭載はなおさら困難となる。約 2000 キロの射程をもつ「北極星 -3」系列を搭載して、アンダーセン米空軍基地を射程に収めるならば、射程距離を延ばして大型化した SLBM を搭載するにも作戦水域を拡大するにも、SSB の大型化が前提となる。北朝鮮が在日米軍だけではなく、アンダーセン米空軍基地に対する対兵力攻撃能力として SLBM を「戦争遂行戦略」に組み込むには、SLBM の射程延長よりは、SSB の大型化に優先順位を与えざるをえない。

金正恩はここで、「中型潜水艦の武装近代化目標の基準を正確に設定」して「海軍の現存の水中作戦能力を著しく向上させうる確固たる展望を開く」と述べたが、これも現存の「ロメオ」級では SLBM を「戦争遂行戦略」に組み込むには不十分であることを自認したに等しい。アンダーセン米空軍基地を射程に収めるには、金正恩がいうように、少なくとも「ロメオ」級を上回る「中型潜水艦」の建造が必要となる。また、さらに潜航距離を延ばすには、ディーゼル燃料では限界がある。金正恩はここで「新しい原子力潜水艦の設計・研究が終わって最終審査段階」にあるとまで述べた。さらに金正恩は、この党大会で「核長距離打撃能力を向上させる上で重要な意義をもつ原子力潜水艦と水中発射型核戦略兵器を保有する課題が上程された」と述べ、SLBM で遠方の標的を攻撃する方法の一つとして、潜水艦の潜航距離を延ばす必要が提起されたことを明らかにしたのである。

わずか3ヶ月前の党75周年閲兵式で SLBM 「北極星 -4」を登場させながら、第8回党大会閉会後の閲兵式にも SLBM 「北極星 -5」を登場させたのも、ICBM が「戦争抑止戦略」の中核となったことと同様、SLBM を「戦争遂行戦略」の中核に位置づけようとする金正恩の意思を示していた。確かに、「北極星 -5」はノーズコーン部分を長くしたため、全長は「北極星 -4」の推定9.8メートルから10.5メートルと若干伸びてはいるが、直径は大差なく⁴¹、注入できる固体燃料の量が大きく増加したとは考えにくい。これが発射されても「北極星 -2」、「北極星 -3」の約2000キロの射程を大きく上回ることはない。

にもかかわらず、金正恩は活動総括報告で「われわれの国家防衛力が敵対勢力の威嚇を

領土外で先制的に制圧することができる (preemptively contain outside our territory) 水準に上り詰めた以上、今後の朝鮮半島情勢激化はすなわち、われわれを脅かす勢力 (複数) の安全保障の不安定へとつながるであろう」(傍点、括弧内は引用者)⁴²と述べていた。「領土外」がSLBMによる攻撃を想定している以上、それは核兵器によると考えるべきであろうし、北朝鮮を「脅かす勢力」に複数形が用いられたのは、米国だけではなく、日本を念頭に置いているからであろう⁴³。これはSLBMによる攻撃能力が対南兵力攻撃によっても在韓米軍の介入を阻止できず、在日米軍基地を用いた戦闘行動の発進を阻止するためにも用いられることを示唆している。ここで金正恩はSLBMを「戦争遂行戦略」——「エスカレーション阻止」——に位置づけていることを改めて示したことになる。

結語——第8回党大会以降の「戦争遂行戦略」

金正恩が2013年3月の党中央委員会全員会議での演説で、「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」に言及して核態勢の輪郭を明らかにしつつ、核使用の方針について宣言して以来、北朝鮮はその二つの「戦略」で相反する核使用に関する宣言的措置——NFUと「核先制打撃」——を堅持し、それぞれに必要な兵器開発を急いできた。それは16年から17年にかけて、ICBMを含む「火星」系列での弾道ミサイル、「北極星」系列でも19年に「北極星-3」に至る一連のSLBM開発で一応の輪郭を整え、19年から20年にかけては「戦争遂行戦略」の下での最初のエスカレーション・ラダーに相当する対南兵力攻撃能力を誇示した。かくして20年10月の党75周年閲兵式と21年1月の第8回党大会で、金正恩は核使用に関する宣言的措置を継承しつつ、「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」のための装備に言及し、閲兵式と軍事パレードでそれらを誇示した。第8回党大会を終えた後、『労働新聞』は社説を掲げ、「わが人民軍隊はいかなる戦争方式にも全て対応することができ、断固制圧粉碎できる強力な戦争遂行能力を備えた無敵の強軍である」(傍点は引用者)⁴⁴と自賛したのである。

もとより、この二つの金正恩による演説からは、北朝鮮が「戦争抑止戦略」と「戦争遂行戦略」で開発の余地が残っている部分も指摘できる。その多くが弾道ミサイルの系列生産に関連していることは指摘した通りである。この生産方式は当初から系列間の相乗効果を期してとられたが、その相乗効果が二つの系列間で均等に表れるとは限らない。弾道ミサイルの射程延長を主眼として液体燃料で開発がすすめられた「火星」系列は、SLBMの開発を主眼に固体燃料で開発がすすめられた「北極星」系列からその技術を転用することで、金正恩が第8回党大会で明言した通り、固体燃料化されたICBMという方向性をとるのであろう。「火星」系列ですすすめられたホット・ローンチよる発射方式も、やがて「北極星」系列ですすすめられたコールド・ローンチに切り替えるかもしれない。そうなれば、「火星-16」が多弾頭化を念頭に置いていることを考えるとき、北朝鮮のICBMは、固体燃料化、コールド・ローンチによる発射方式に加え、多弾頭化されることになる。金正恩は第8回党大会の結論として、新たな5カ年計画との関連で「軍需生産目標と課題を無条件に遂行し(中略)わが党の歴史的進軍を最強の軍事力で保障しなければなりません」⁴⁵と述べたが、このようなICBM開発の方向性も「軍需生産目標」に定められたに違いない。

これに対して、「北極星」系列が「火星」系列から技術転用される段階にはない。「北極星」系列のSLBMが射程を延ばそうにも、それを搭載するSSBの開発が相応していないから

である。「北極星」系列で最後に発射実験されたのは「北極星 -3」であるが、その後継とみられる「北極星 -4」、「北極星 -5」が——未実験とはいえ——「北極星 -3」の射程約 2000 キロを大きく上回るとは考えられないのはそのためである。「北極星」系列の SLBM がその射程を延ばすのは、北朝鮮が射程延長とともに大型化された SLBM を搭載できる中型以上の潜水艦を建造してからと考えてよい。そのとき ICBM が固体燃料化、コールド・ローンチ発射方式への転換を済ませ、多弾頭化されていたならば、「火星」系列の ICBM の技術が「北極星」系列の SLBM に「逆転用」されるかもしれない。

他方、第 8 回党大会での金正恩による活動総括報告をみて、改めて瞠目させられるのは金正恩がこれまで開発した兵器だけではなく、これから開発すべき兵器も列挙していたことである。ここで検討した ICBM、SLBM のほかに、金正恩は「中長距離巡航ミサイルをはじめとする先端核戦術兵器を次々と開発することによって、頼もしい軍事技術的強勢を堅持した」として、巡航ミサイルに言及した他⁴⁶、「新型弾道ロケットに適用する極超音速滑空飛行戦闘部」はすでに「弾頭開発研究を終え、試験製作に入るための準備を行っている」と述べ、「各種の電子兵器、無人打撃装備、偵察探知手段、軍事偵察衛星」についても言及した。金正恩が過去、これほど個々の兵器、装備を列挙した演説はない。

なかでも強調しておくべきは、金正恩が「国防工業を飛躍的に強化発展させるための中核的構想と重要な戦略的課題」として、「核兵器の小型軽量化、戦術兵器化を一層発展させ、現代戦での作戦任務の目的と打撃対象によって、様々な手段に適用できる戦術核兵器を開発する」（傍点は引用者）と述べたことである。いうまでもなく、核兵器の「小型軽量化」であれ、「戦術兵器化」であれ、それは本来、爆発力をあえて制御することを意味し、甚大な爆発力で人命、都市機能などの破壊を目的とする対価値攻撃を目的にしている。

一方、これまで北朝鮮は対南兵力攻撃を「戦争遂行戦略」の下での「エスカレーション阻止」の最初のラダーに位置づけながらも、そこでの核使用には慎重な立場を貫いていた。2019 年から 20 年にかけて、対南兵力攻撃能力を誇示したときも、それは米国による核の報復を招かないよう KN-23、「超大型放射砲」などの非核戦力に限られていた。振り返ってみても、17 年 5 月、『労働新聞』は「スカッド -ER」の発射実験後、「最初に放射能の雲に包まれるのは日本」⁴⁷（傍点は引用者）とする論評を掲載していた。第 8 回党大会を受け『労働新聞』が掲げた社説も、「最も強力な攻撃的力」として核兵器を示唆しながら、それが「先制的」に「動員」されるのが「領土外」であるとしたが⁴⁸、それは翻れば、北朝鮮は核兵器を朝鮮半島内部では使用しないことを想定していたことになる。しかし、北朝鮮が「戦術核兵器」を保有することは、それを北朝鮮の「領土内」で使用する可能性を自認するに等しい。これが KN-23、「超大型放射砲」などの対南兵力攻撃能力に「戦術核兵器」が加わる——あるいは KN-23 に核弾頭が搭載される——ことを意味するとすれば、北朝鮮「領土外」で核兵器が「先制的」に「動員」される前に、その「領土内」で核兵器が使用される可能性を孕む。そうだとすれば、「戦術核兵器」は、「戦争遂行戦略」が想定するエスカレーション・ラダーに大きな変更を迫ることになる⁴⁹。

— 注 —

- 1 金正恩による朝鮮労働党第7回大会での活動報告は、「朝鮮労働党第7次大会で行った党中央委員会事業総和報告」『労働新聞』2016年5月8日（邦訳は、「朝鮮労働党第7次大会でおこなった中央委員会の活動報告、2016年5月6日、7日」『金正恩著作集2』、白峰社、2017年、207頁）。
- 2 「敬愛する金正恩同志が朝鮮労働党中央委員会2013年3月全員会議で行われた報告」『労働新聞』2013年4月1日（邦訳は、「朝鮮労働党中央委員会2013年3月総会における報告、2013年3月31日」『金正恩著作集』、白峰社、2014年、224頁）。
- 3 「朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議法令——自衛的核保有国の地位をさらに堅固にすることについて」『民主朝鮮』2013年4月2日。なお、「敵対的な他の核保有国」は、朝鮮中央通信の英文表記では単数形が用いられている（See, “Law on Consolidating Position of Nuclear Weapons State Adopted” KCNA, April 1, 2013 <www.kcna.co.jp/index-e.htm>）。
- 4 この詳細は、拙稿「金正恩『核ドクトリン』の生成と展開——比較のなかの北朝鮮『最小限抑止』の現段階」『北朝鮮をめぐる将来の安全保障環境』、防衛研究所、2017年。See also, Hideya Kurata, “Kim Jong-un’s Nuclear Posture under Transformation: The Source of North Korea’s Counterforce Compulsion,” Hideya Kurata and Jerker Hellström (eds.), *North Korea’s Security Threats Reexamined*, Yokosuka: National Defense Academy, 2019.
- 5 「蓮川砲撃戦」についてはさしあたり、拙稿「北朝鮮の核態勢における対南関係——『エスカレーション・ドミナンス』の陥穽」外務省外交・安全保障調査研究事業『安全保障政策のリアリティ・チェック——新安保法制・ガイドラインと朝鮮半島・中東情勢：朝鮮半島の総合分析と日本の安全保障』、日本国際問題研究所、2017年3月、84頁を参照。
- 6 Hideya Kurata, “Escaping from the ‘Accuracy-Vulnerability Paradox’: The DPRK’s Initial Escalation Ladders in War Strategy,” Hideya Kurata and Jerker Hellström (eds.), *Nuclear Threshold Lowered?* Yokosuka: National Defense Academy, 2021, pp. 98-101.
- 7 「朝鮮労働党中央委員会政治局会議で決定書——朝鮮労働党創建70周年、祖国解放70周年を偉大なる党の領導に従って強盛繁栄する先軍朝鮮の革命的大慶事として迎えることについて」『労働新聞』2015年2月13日。ただし、決定書自体は報じられていない。2016年から17年にかけての北朝鮮の弾道ミサイル発射実験の詳細は、以下に述べる「北極星」系列の弾道ミサイル発射も含め、拙稿「北朝鮮の核態勢と対価値・対兵力攻撃能力——弾道ミサイル開発の二系列」平成29年外務省外交・安全保障調査研究事業『「不確実性の時代」の朝鮮半島と日本の外交・安全保障』、日本国際問題研究所、2018年、51～59頁を参照。
- 8 北朝鮮は「火星-9」発射については、「中距離弾道弾」、「中長距離弾道弾」の区分を行っていない（本紙政治報道班「敬愛する最高領導者金正恩同志が朝鮮人民軍戦略軍火星砲兵部隊の弾道ロケット発射訓練を指導された」『労働新聞』2017年3月7日）。
- 9 2014年6月16日、金正恩第1書記（当時）が朝鮮人民軍海軍第167部隊を視察したとき、「潜水艦第748号」に乗船視察したと報じられたが（「朝鮮人民軍最高司令官金正恩同志が呉仲治7連隊称号を授与された朝鮮人民海軍第167軍部隊を視察された」『労働新聞』2014年6月17日）、「潜水艦第748号」は「ロメオ」級に相当していた。
- 10 Norman Polmar and Kenneth J. Moore, *Cold War Submarines: The Design and Construction of U.S. and Soviet Submarines, 1945-2001*, Washington D.C.: Potomac Books, 2003, p. 30; see also, “Project 611 Zulu Class” <<https://www.globalsecurity.org/military/world/russia/611.htm>>.
- 11 Joseph S. Bermudez Jr., “North Korea’s Submarine Ballistic Missile Program Moves Ahead: Indications of Shipbuilding and Missile Ejection Testing, 38 North, November 16, 2017 <<https://www.38north.org/2017/11/sinpo111617/>>.
- 12 Ankit Panda, “Kim Jong Un’s New Ballistic Missile Submarine: The Future of North Korea’s Undersea Nuclear Deterrent, North Korea’s New Ballistic Missile Submarine Is a Sign of What Lies Ahead for Its Undersea Nuclear Deterrent” *The Diplomat* <<https://thediplomat.com/2019/07/kim-jong-uns-new-ballistic-missile-submarine-the-future-of-north-koreas-undersea-nuclear-deterrent/>>.
- 13 H.I Sutton, “Romeo-Mod Submarine” *Covert Shores*, 23 July 2019 <www.hisutton.com/ROMEO-Mod_Submarine.html>.
- 14 「敬愛する最高領導者金正恩同志が新たに建造された潜水艦をご覧になった」『労働新聞』2019年7月

- 23 日。
- 15 トン・テグァン「政論——地球を見下ろしたわれわれの『北極星』」『労働新聞』2019年10月4日。
- 16 「重大実験に成功（12.7、平壤12月8日発、朝鮮中央通信）」『朝鮮民主主義人民共和国月間論調』2019年12月、11頁。
- 17 「再び重大実験実施（12.13、平壤12月14日発、朝鮮中央通信）」、同上、11頁。
- 18 「重大実験の成果は戦略兵器開発に適用（朴正天総参謀長談話12.14）」、同上、11頁。
- 19 前掲拙稿「北朝鮮の核態勢と対価値・対兵力攻撃能力」、53～54頁。
- 20 「わが党の国防科学技術重視政策が生んだいま一つの誇り溢れる成果、大出力固体ロケット発動機地上噴出および段階分離試験で成功——敬愛する金正恩同志が大出力固体燃料ロケット発動機地上噴出及び段階分離試験を指導された」『民主朝鮮』2016年3月24日。
- 21 Ankit Panda, “North Korea Has Tested a New Solid-Fuel Missile Engine: North Korean Scientists Tested a New Solid Fuel Engine on October 2017, What System Is It Destined for? October 25, 2017” The Diplomat <<https://thediplomat.com/2017/10/north-korea-has-tested-a-new-solid-fuel-missile-engine/>>. 咸鏡南道咸興と興南区域には、固体燃料生産のための基幹施設があるという（Ankit Panda, *Kim Jong Un and the Bomb: Survival and Deterrence in North Korea*, New York: Oxford University Press, 2020, p. 149）。
- 22 「朝鮮民主主義人民共和国政府声明——新型大陸間弾道ロケット試験発射成功」『民主朝鮮』2017年11月29日。以下、この政府声明からの引用はこの文献による。「火星-15」に関しては、前掲拙稿「北朝鮮の核態勢と対価値・対兵力攻撃能力」、60～61頁を参照されたい。
- 23 「朝鮮労働党中央軍事委員会第7期第3次拡大会議進行——敬愛する最高領導者金正恩同志が党中央軍事委員会拡大会議指導」『労働新聞』2019年12月22日。
- 24 「朝鮮労働党中央委員会第7期第5次全員会議に関する報道」『労働新聞』2020年1月1日。
- 25 「朝鮮労働党中央軍事委員会第7期第4次拡大会議進行——敬愛する最高領導者金正恩同志が党中央軍事委員会拡大会議指導」『労働新聞』2020年5月24日。括弧内の英文表記は、“Supreme Leader Kim Jong Un Guides Enlarged Meeting of WPK Central Military Commission, Pyongyang, May 24” KCNA <www.kcna.co.jp/index-e.htm> による。
- 26 注2（邦訳書、217頁）を参照。
- 27 ミョン・チュヒョク「強力な自衛力があり、われわれの勝利は確定的である」『労働新聞』2019年8月31日。
- 28 「朝鮮労働党中央軍事委員会第7期第5次拡大会議進行——敬愛する最高領導者金正恩同志が拡大会議指導」『労働新聞』2020年7月19日。
- 29 「偉大なる勝利者らの遺訓は永遠不滅であろう——第6次全国老兵大会で行われた金正恩同志の演説」『労働新聞』2020年7月28日。
- 30 「朝鮮労働党創建75周年閲兵式でなされたわが党と国家、武力の最高領導者、金正恩同志の演説」『労働新聞』2020年10月10日。
- 31 括弧内の英文は、朝鮮中央通信の英文配信（“Supreme Leader Kim Jong Un Delivers Speech at Military Parade” KCNA, October 10, 2020 <www.kcna.co.jp/index-e.htm> による。See also, “Speech Delivered by Kim Jong Un at the Military Parade,” *Democratic People’s Republic of Korea*, Juche 109 (2020), 10 (No. 778, Special Edition), p. 9.
- 32 Gabriel Dominguez, “Increased Deterrence,” *Janes Defence Weekly*, Volume 57, Issue 43 (21 October 2020), p. 24.
- 33 Micheal Elleman, “Does Size Matter? North Korea’s Newest ICBM” 38 North, October 21, 2020 <<https://www.38north.org/2020/10/melleman102120/>>. なお、このときの軍事パレードに登場した装備については、その殆どを画像で示した『国家防衛力強化のために』平壤、朝鮮民主主義人民共和国・外国文出版社、2020年も参照した。
- 34 Kurata, “Escaping from the ‘Accuracy-Vulnerability Paradox,’ p. 99.
- 35 北朝鮮が「SLBM搭載が可能な3000トン級潜水艦」を建造していることは、韓国で報じられていた（『朝鮮日報』2019年4月5日）。党75周年閲兵式の後、韓国の国家情報院は北朝鮮がSLBMを搭載できる潜水艦を2隻開発しているとの観測を明らかにし、これは日本でも報じられた（『日本経済新聞』2020年11月4日<夕刊>）。その1隻は「ロメオ」級改良型で、もう1隻は中大型級の新型という。See also, Gabriel Dominguez and Matteo Scarano, “North Korea Building a Third, Larger and More Capable SSB, Says Seoul,” *Janes Defence Weekly*, Volume 57, Issue 43 (18 November 2020), p. 4.
- 36 以下、金正恩による活動総括報告からの引用は、「われわれ式社会主義建設を新たな勝利へと導く偉大

- な闘争綱領——朝鮮労働党第8次大会で行われた金正恩同志の報告について」『労働新聞』2021年1月9日。ただし、『労働新聞』では、金正恩の活動総括報告を全文で掲載するというかたちをとっていない。
- 37 金正官による演説の朝鮮文は、「朝鮮労働党第8次大会記念閲兵式で行った朝鮮民主主義人民共和国金正官国防相の演説」『労働新聞』2021年1月15日、朝鮮中央通信による英文は、“DPRK Defence Minister Addresses Military Parade,” *Pyongyang Times*, January 16, 2021 による。括弧内の“contain”もこの朝鮮中央通信の英文配信による。以前の人民武力省はこの党大会で国防省に改称された。なお、この閲兵式で行われた演説は、金正官によるものしか記録されていない。金正恩は党75周年閲兵式では演説を行っていたが、ここでは行わなかったとみられる。
- 38 括弧内の英文は“Kim Jong Un Delivers Opening Speech at Eighth WPK Congress,” *Pyongyang Times*, January 10, 2021 からの引用による。なお、これも朝鮮中央通信の英文配信による。
- 39 「朝鮮民主主義人民共和国政府声明——新型大陸間弾道ロケット試験発射成功」『民主朝鮮』2017年11月27日。以下、この政府声明からの引用は、この文献による。なお、この政府声明については、前掲拙稿「北朝鮮の核態勢と対価値・対兵力攻撃能力」、60～61頁でも検討している。
- 40 同上、60頁。
- 41 Michael Elleman, “North Korea’s Newest Submarine-Launched Ballistic Missile, Same as the Old One?” 38 North, January 15, 2021” <<https://www.38north.org/2021/01/north-koreas-newest-submarine-launched-ballistic-missile-same-as-the-old-one/>>. 「北極星 -5」が「北極星 -4」と並んで、サイロからの地上発射型弾道ミサイル (GLBM) であると推測する分析もあるが (See, Norbert Brüggel, “The New ‘Thick’ Solid-fuel Missiles Pukguksong-4 and -5 GLBM: North Korean First Silo-based Missiles?” <https://www.b14643.de/Spacerockets/Specials/Pukguksong-4and5_GLBM/index.htm>), 本稿は「北極星 -4」と「北極星 -5」が射程を伸ばしていないことは、SSBに搭載することを念頭に置いていたからに他ならないと考える。なお、軍事パレードでは「北極星 -5」について「世界最強の兵器、水中戦略弾道弾」とナレーションされたという。これについては、「朝鮮労働党第8回記念閲兵式 (2021年1月14日) に関する朝鮮中央テレビの実況録画映像の概要」『RP北朝鮮政策動向』令和3年 (2021年) 第1号 (No. 591, 1月25日発行)、98頁。
- 42 括弧内の英文は“On Comrade Kim Jong Un’s Report to the Eighth Congress of the Worker’s Party of Korea,” *Korea Today*, Juche 110 (2021), No.2, p. 33 からの引用による。
- 43 「朝鮮労働党第8次大会記念閲兵式——金正恩総秘書参席 (平壤1月15日発、朝鮮中央通信)」<www.kcna.co.jp/index-k.htm>。朝鮮中央通信配信の英文でこの部分に該当するのは、“The Columns of Rockets with Powerful Striking Capability of Thoroughly Annihilating Enemies in a Preemptive Way Outside the Territory Roared Past” と考えられる (“Eighth WPK Congress Celebrations Topped off with Military Parade,” *Pyongyang Times*, January 16, 2021)。閲兵式に関して朝鮮中央通信は「どんな敵であれ、われわれの領土外で先制的で徹底的に掃滅できる強い攻撃力を備えた頼もしいわれわれのロケット縦隊が激しい轟音で地心を揺るがした」と報じていた。
- 44 「社説——朝鮮労働党の指導に限りなく忠実な革命的党軍がありチュチェの社会主義偉業は必勝不敗である」『労働新聞』2021年2月8日。
- 45 「朝鮮労働党第8次大会で下した結論 金正恩」『労働新聞』2021年1月13日。
- 46 韓国国防部によれば、2017年6月8日に短距離地对艦巡航ミサイルの実験が行われ、飛行距離は約200キロと推測された (『国防日報』2017年6月9日)。20年4月14日にも同種の実験が行われ、約150キロ飛行したという (『国防日報』2020年4月16日)。金正恩は「中長距離巡航ミサイル」を含む「先端戦術核兵器」が開発され、「頼もしい軍事技術的優位を堅持した」と過去形を用いているが、「中長距離巡航ミサイル」が発射されたとは確認されていない。
- 47 リ・ヒョンド「自ら破滅を招く無謀な妄動」『労働新聞』2017年5月2日。Kurata, “Escaping from the ‘Accuracy-Vulnerability Paradox,’” p. 104.
- 48 注44に同じ。なお、この社説は、第8回党大会での閲兵式に際して朝鮮中央通信が報じた「われわれの領域の外で先制的で徹底的に掃滅できる強い攻撃力」に「最も」を加えて、「もし敵対勢力 (複数) がわれわれを毛先ほども刺激するなら、わが人民軍隊は最も強力な攻撃的力を先制的に動員し共和国の領土外で徹底的に懲らしめるだろう」(括弧内、傍点は引用者) として、北朝鮮の「領土外」で用いられる「攻撃的力」が核戦力であることをより強く示唆していた。
- 49 紙幅の関係上、北朝鮮の「戦術核兵器」がもつ抑止論上の含意については、稿を改めて論じることとする。